Letter of the M.Y. elementary school

ひ び き　南山田小学校だより

～ ともだちいっぱい　かがやく子 ～

学校通信　NO.300
令和２年度２月号
令和３年１月２９日

『　君があるがままの君じゃなかったら・・・　』

副校長　志波　亮

大寒を過ぎたとはいえ、厳しい寒さが続く今日この頃です。保護者の皆様、地域の皆様におかれましては感染症対策とともに防寒対策も並行して講じながら、ご健勝のことと拝察いたします。

さて、読書する機会が増えたこともあり、ある物語と出逢いました。ご紹介します。

むかし、水くみを仕事にする男がいました。彼は、天秤棒の端にそれぞれの壺をさげ、首の後ろで天秤棒を左右に分けてご主人の家まで毎日水を運びます。その壺の一つにはひびが入っていて、もう一つはひび一つない完璧な壺でした。完璧な壺は小川からご主人の家まで一滴もこぼさないのに、ひび割れ壺は家に着くころには半分になっていました。

完璧な壺はいつも自分を誇りに思っていました。なぜなら、本来の目的をいつも達成できたから。ひび割れ壺は、いつも自分を恥じていました。なぜなら、本来の目的を半分しか達成することができなかったから。

ある日、ひび割れ壺は水くみの男に話しかけました。

「私は、自分が恥ずかしい。そしてあなたにすまないと思っている。」

男はたずねました。「何を恥じているの？」

「私のひびのせいで、あなたはご主人の家まで水を半分しか運べなかった。あなたが努力をしてもその努力が報われることがない。それがつらいんだ。」と壺は言いました。「これから主人の家に帰る途中、道端に咲いている花を見てごらん」と男は言いました。ひび割れ壺は美しく咲き誇る道端の花に気づきましたが、また水を半分こぼしてしまった自分を恥じて男に謝りました。

すると男は言ったのです。「花が君の側にしか咲いていないことに気づいたかい？僕は君からこぼれる水に気づいて、花の種をまいたんだ。そして、君は毎日、水をまいてくれた。僕はご主人の食卓に花を欠かしたことがない。君があるがままの君じゃなかったら、ご主人はこの美しさで家を飾ることはできなかったんだよ。」

この作者不明の物語は、私にたくさんのことを考えさせてくれました。

完璧な人はどこにもいません。大人も子どももだれもが十人十色のひびをもっているのではないでしょうか。

私たち大人は、子どもたちのひびを責めることはできません。

そして、子どもが自分のひびを責めることでもありません。

大人が子どものひびを欠点だと決めつけたり、否定したりするのではなく、見つめ、受け止め、子どもに合った花の種をそっとまく。そして、それが芽を出し、実るように見守り、生かして花を咲かせてあげること。別の言い方をするならば、子どもが、ありのままの自分（個性）を好きになり、その個性を磨き、伸ばしていくために支え励ますこと、それこそが大人の務めだと思います。

今後も感染症拡大防止策を継続して講じていくことはもちろんのこと、子どもたちの安心・安全を第一に考え、保護者の皆様、地域の皆様とともに、学校も、よりよいお子さんの成長を心より願いながら教育活動の向上や改善に努めてまいります。そして、全教職員が一丸となり南小の子どもたち一人ひとりが自分のよさに気づき、自分のことが好きになる、自己有用感や自己肯定感を育み、高まる指導、支援に力を尽くしてまいります。

今後とも、本校の教育活動への保護者の皆様、地域の皆様の変わらぬご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

学校では、感染症対策として換気をしつつ、エアコンで室内の温度調節をし、子どもたちには水分補給の声かけと時間確保をして暑さと上手につきあいながら学校生活を送っています。

今回は、『百聞は一見にしかず』を話題にさせていただきます。多くの方に馴染みのあるこのことわざは、ご存知の通り、百回聞くよりも一回見るほうがよくわかることを意味します。私も小学生の時に先生から教えてもらった気がします。そして、教員となってからも、校外学習等で出かける際には、このことわざを引用して子ども達に本物をその目で見ることの大切さを伝えてきました。

さて、このことわざに続きがあることをみなさんご存知でしょうか。実は、私は今年になり、ある本を読んで、その続きがあることを知り、大変驚きました。
どのような言葉が続くのでしょうか。『　百聞は一見にしかず　』に続くのは、
『　**百見**は**一考**にしかず　』
<意味>たくさん見ても、それを基に考えなければ意味がないということ。
『　**百考**は**一行**にしかず　』
<意味>たくさん考えても、考えたことを行動に移さないと意味がないということ。
『　**百行**は**一効**にしかず　』
<意味>様々な行動をしても、一つでも成果が得られないと意味がないということ。
『　**百効**は**一幸**にしかず　』
<意味>たくさん成果を上げてもそれが幸せに繋がらないなら意味がないということ。
『　**百幸**は**一皇**にしかず　』です。
<意味>個人の幸せがたくさんあっても、すべての人のために行動しなければ意味がないということ。

そもそも、このことわざは古代中国のある逸話から生まれ、その後、付け加えられていったようです。今や、インターネットやスマートフォンなど高度情報化社会、自宅に居ながらにして容易に世界中の情報を見たり、知ったりすることができます。知り得た（**見た**）すべての情報が正しく、真実だと信じたり、理解できたと思ったりするのではなく、なぜそうなのか、本当に正しいのか、理解できたのか一旦立ち止まり、不思議だなと**考えたり**、多角的に**考えたり**、確かめる方法を**考えたり**すること。さらに、考えた方法の中から自分の目で確かめに行ったりもっと調べたりなど問題解決のために**行動すること**が大切なことだとこのことわざは示唆しているように思えてなりません。何百年も前から伝わることわざは現代にも照らして考えることができるのです。本校がめざす子どもの資質・能力の一つに「**主体的に問題解決していく力**」があります。それは自ら試行錯誤しながら粘り強く問題解決を繰り返すプロセスを通して育成される力であり、未来をたくましく、そしてしなやかに生き抜いていくために必要不可欠な力です。まさに、先人の教えと合致するように思えます。

感染症拡大防止を最優先に考えながらも、本校の教育活動がさらに充実したものになりますよう全教職員で力を尽くしてまいります。今後とも保護者の皆様、地域の皆様のご支援、ご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

『人を笑顔にする算数　～おもいやり算～　』

副校長　志波　亮

「＋」は、たすけあうこと
「－」は、ひきうけること
「×」は、声をかけあうこと
そして、
「÷」は、わけあうこと
それは人を笑顔にする算数、おもいやり算
ほら、やさしいでしょ

これは、私が心に深く残ったあるテレビ広告です。東日本大震災のあとに放送されました。テレビ広告を見終わったときに、心がぽかぽかと温かくなったと同時にメモを取る自分がいました。私は、小学校教員となり、当然のことながら算数を毎年授業してきましたが、こんな素敵な、人を笑顔にする算数「おもいやり算」の存在をその時初めて知りました。

小学校の算数では、＋（たし算）、－（ひき算）、×（かけ算）、÷（わり算）が交ざった計算式を小学校４年生で学習します。その時に「計算のきまり」も学びます。例えば、「５＋２×３」という式は「２×３」を先にするというきまりです。これは、たし算よりかけ算を先にしましょうという約束です。これを「かけ算優先のきまり」

と言います。ですが、「おもいやり算」には、「たすけあう」より「声をかけあう」を先にするきまりはありません。どこからやっても答えにあやまりは出ないのです。

困っている友達がいれば「たすけあい」
大変なことや割に合わないことでも「ひきうけ」
あいさつやありがとう、ごめんねの「声をかけあい」
喜びや楽しいこと、悲しみさえもみんなで「わけあう」

みんなを笑顔にする算数「おもいやり算」のあふれる学級を、そして南山田小学校を全校のみんなと全教職員で創っていきたいと思います。

今後とも、保護者の皆様、地域の皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。

みて、をご存知の方も多いのではないでしょうか。大正末期から昭和初期にかけて活躍した童謡詩人　**金子みすゞ**さんの代表的な詩です。小学校の教科書にも採用されたり、昨年度の図書委員会による図書集会でもこの作品をテーマにして全校発表したりしたので、多くの子ども達も知っていることでしょう。

わたしがこの詩と初めて出逢ったとき、胸がぽかぽかと温かくなり、何とも言えない心地よさと安心感に包まれ、一瞬で大好きになったことを今でも覚えています。教員となり、これまでたくさんの子ども達と出逢わせてもらい、学校生活を共に過ごす中で、クラスの子どもたちにこの詩を紹介し、発達段階に合わせて子ども達みんなでこの詩について考えました。仲間一人ひとりのちがいを認め、尊重し合うことの大切さ、自分自身のことも大切にする尊さについて学習を深めたことを思い出します。みんながちがう考えをもち、みんながちがう性格や人格があることが自然であり、当然であること。まさに『みんなちがって　みんないい』ことをクラスの合言葉にしたものでした。

併せて、『みんな同じで　みんないい』ということもみんなで考えました。それは、どういうことなのか。学校は、クラス、学年、全校という集団で生活を共にする場で

す。みんなが、居心地よく、安全に、そして安心して学校生活を送るために必要なこと、それはルールです。みんなが守るべきルールこそが『みんな同じで　みんないい』ことなのです。学校では、廊下は走らないこと、時間を守って行動することなど様々なルールがありますが、その一つひとつをみんなが守ってこそ、居心地よく、安全に、そして安心して学校生活を送ることができます。この度の感染症拡大に伴い、学校は拡大防止の措置を講じるために、新しい学校生活様式が必要となりました。国や横浜市のガイドラインを基にしながら、本校にも新しいルールが追加されたり、これまでのものが変更になったりしています。例えば、毎朝、おうちの方と検温し、健康観察をして健康観察票を毎日提出すること、校内では基本的にマスクを着用（熱中症予防等の理由で例外あり）すること、授業時間の始まりと終わりには必ず丁寧な手洗いをすること、友達とは距離をとり、コミュニケーションを図ることなどです。子どもたちには不自由な思いをさせることも増えましたが、子ども達の安心・安全に勝るものはありません。新しい『みんな同じで　みんないい』ルールはとても大切な新しい学校の生活に必要不可欠なものとして今後も継続して全教職員で指導、支援してまいります。

保護者の皆様や地域の皆様には、日頃より、本校の教育活動へのご支援、ご協力をいただいておりますことと同時に、これまでの感染症拡大防止措置へのご理解、ご協力に心より感謝申し上げます。明日から始まります夏休み以降も、感染症拡大防止措置へのご理解、ご協力を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

光りや輝きこそ個性やパーソナリティー。とりわけ、小学生の６年間それを個性や新元号「令和」に変わり、はや５か月が経ちました。みなさんは、新元号に慣れましたでしょうか。

「平成最後の〇〇」という言葉がいたるところで使われ、寂しい気持ちがした４月まででしたが、今では「令和初の〇〇」という言葉をよく耳にします。不思議なもので、「令和初」と聞くと、ちょっとした高揚感と同時に力が湧いてくる気がするのは私だけでしょうか。１０月２０日実施しました「第２３回　運動会」も「令和初の運動会」となりました。当日に向けて体育館や校庭では、徒競走、団体競技、団体演技はもちろんのこと、応援団員の応援練習やリレーのバトンパス練習など運動会に向けて熱心に額に汗をかきながら練習する子どもたちの元気な声やエネルギッシュに取り組む生き生きとした姿があふれていました。さらに、高学年は裏方の仕事として運動会を支える様々な係もあり、責任もって準備を進める姿は頼もしい存在でした。

さて、「令和」とは、外国にはどのように伝えられ、表現されているかご存知の方も多いと思います。文頭に大きく書きました***【Beautiful　Harmony　ビューティフル　ハーモニー】***と訳され、広まっているようです。なぜでしょう。それは、新元号発表時に「令和の時代は、人々が美しく心を寄せ合うなかで文化が生まれ育つ。」という意味が込められると政府が説明しました。また、「日本人が明日への希望とともにそれぞれの花を大きく咲かせることができる日本でありたい。」とも付け加えて説明したことなどが要因のようです。

運動会当日は、保護者の皆様や地域の皆様など多数のご参観やご声援をいただきました。両手を前後にふって全力でゴールを目指した徒競走。友達と心を一つに、指先、目線まで意識して体全身で表現した団体演技。友達と勝利を目指し、力強く競い合った団体競技。友達のために声がかれるまで大声を出し、力いっぱいに応援した応援団。友達と心とバトンをつなぎ、風を切って走ったリレー選手。そして、運動会が円滑に進むように陰で支え続けた高

学年の子ども達。そのきらきらと輝く数々のシーンがそこにありました。子ども達の運動会で「○○をがんばりたい。」「○○で１位になりたい。」「○○を成功させたい。」など寄せる思いは一人ひとり違います。ですが、子ども達の純粋で素直な美しい心を寄せ合いながら、ひたむきに表現するその姿が、色とりどりの大きな花となり、南山田小の校庭に咲き誇りました。その光景は、見てくださった皆様の心に響いたのではないでしょうか。

「第 23 回　令和初の運動会」を大きな事故やけが等がなく、無事に終えることができました。これも、保護者・地域の皆様の多大なご支援、ご協力があってのことでした。この場を借りまして御礼申し上げます。また、子ども達一人ひとりが達成感や満足感を得られた運動会となりましのなら教職員一同も心よりうれしく思います。

新時代・令和も運動会をはじめ、本校の目指す教育活動の実現に向け、保護者の皆様、地域の皆様のご協力・ご支援をいただきながら、学校・家庭・地域が***【Beautiful　Harmony】***を奏で、本校の子ども達のよりよい健全育成につなげていきたいと思います。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。